

# 喜劇と悲劇 (三) —— 森本薫とその時代

佐々木 徹

## Komödie und Tragödie Nr. 3 — Kaoru Morimoto und seine Zeit

Toru SASAKI

森本薫は一九二二年(明治45)六月四日、大阪市東淀川区中津南通に、町工場を営む森本卯蔵の次男として生まれた。

大阪府立北野中学校から第三高等学校文科甲類に進み、担任の山本修二のもと、文学や演劇にたいする素養を積む環境に恵まれた。同級に田宮寅彦、一年下に織田作之助、二年下には野間宏、富士正晴らがいた。

一九三三年(昭和8)、京都大学文学部英文科に進学、三四年、同人雑誌『部屋』につきつきと創作劇を発表、同年十一月『劇作』に掲載された『みごとな女』で岩田豊雄の絶賛を受けた。一九三八年(昭和13)三月、文学座試演第一回に『みごとな女』がとりあげられ、それを機に上京、ラジオドラマや映画のシナリオ

を書いた。木下恵介監督の映画『歓呼の町』のシナリオを担当、つづいて『神風特別攻撃隊』を書く予定だったが、出征する息子を母親が涙ながらに見送るシーンを延々と撮った『陸軍』が当局のひんしゆくを買い、この映画は、脚本・監督ともに別の者に変更された。

上京とともにすでに結婚、一子をもうけていたが、文筆だけでは生活ができず、妻の実家の仕送りに頼ることもあった。

一九四〇年(昭和15)、岩田豊雄のすすめで文学座に入り、杉村春子と知り合い、彼女のために『女の一生』を書くことになる。森本薫は、一九四六年(昭和21)十月六日、肺結核のため亡くなった。

『女の一生』は、若くして亡くなった劇作家・森本薫の代表作だが、同時に、文学座の杉村春子の代表作ともなった。主人公・布引けいを十六歳から六十歳まで演じわけ、一九九七年（平成7）四月四日に亡くなるまで、じつに九四七回の上演回数を数える。杉村春子なくして『女の一生』はなく、主人公の波乱にみちた生涯は、ときに女優・杉村春子の人生とも比較された。

『女の一生』の初演は、終戦まじかの一九四五年（昭和20）四月、公演は七回で、空襲警報のため中断することもあった。戦時下にもかかわらず、大勢の観客を動員したが、戦後になって、森本薫がプロログとエピログを書きかえたことにより、作品としての成功が定まったと言える。

以来、公演回数を重ね、『女の一生』は文学座の貴重な財産となった。もともと杉村春子のために書き下ろされたものなので、布引けいは杉村春子の当たり役だが、女優として、また女として年輪を増すとともに、その役も磨き上げられた。

## 一 同じ誕生日に

プロログもエピログも、同じ終戦後の東京、焼け野原となった町の一角。

主人公の布引けいは白髪で、すっかり年をとっている。

役の設定では六十歳だが、その時代ではもうかなりの年齢だった。着物も地味で、とても最近の六十代とは比較にならない。そ

の日の食糧にも事欠く戦後のこと、髪を染めることなど、思いも寄らなかつた時代である。

暖をとるため、焼け跡の木切れをひろって燃やしているけいのところへ、やはり白髪のひとりの男性がたずねて来る。

「ちょっとお伺いしたいのですか」

「はあ」

「並河町六番地というのは、たしかこの辺だったのですね」

「六番地はこの辺でしたがね、みんな焼けちまいましたよ」

「まったくひどいもんですね。一軒残らずっていう感じですが」

「一軒残らずですよ。どこもかしこも、きれいさっぱり。残っ

ているのは、蔵の壁と金庫と石灯籠。どちらをおたずねなんです

か」

「いや、もうよしましょう。こう見渡すかぎりじゃ、わざわざ

焼け跡を探して歩くまでもありません。大体、覚悟してきたので

す」

男は、切石に腰をおろして、たばこに火をつける。

すしづめの列車に乗り、やっとの思いで盛岡から東京へ出てき

たのであった。

それには理由があった。思想活動の罪でとらわれていたのが終戦になり出所、自分の生まれ育った家をたずねてきたのである。

「奥さんは、ここに一人でお住まいなんですか」

「ええ、泥棒が入ったって取られるものは焼けちまってないし、

この年寄りをどうしようという人もないでしょうし、結局、気楽

なひとり住まいです」

「お身寄りの方はないんですか」

「結局」という古い言い方をしているが、「あげく」と同じく、もとは詩歌の最後の句をさした。そこから転じて「結局」という意味になったが、ここでは、「むしろ」「かえって」という気持ちも含まれている。「お身寄りの方」という言い方もていねいで、知らない人、はじめての人にたいする礼節をあらわしている。

そんな言葉づかいに気をゆるしたけいは、思わず今の境遇や感慨を話してしまい、

「あら、いやだ、しばらく人とおしゃべりをしないものだから、すっかりいろんなことしゃべってしまっ」

と自分を振り返るが、たぶん、理由はそれだけではなく、心をゆるす何かを感じ取っていたのであろう。

たばこを消して立ち去ろうとした男は、けいが口ずさむ歌に引きとめらる。

「あの……」

「何か」

「今の、その歌は」

男の問いかけに、けいは笑って、

「何でしょう、今頃こんな歌を思い出すなんて。ずっと以前、

私はまだ子供の時分に聞きおぼえて、いまだに忘れられないたった一つの歌なんですよ」

「(思い切ったように) おけいさん」

「え」

「そうか、するとやっぱりここがあの家だったんだ。そう言えば、変わり果てたなかにも、思い出すいろんなものがある。このくつぬぎ石は、まわり縁から庭へ出るときいつもふんずけたものだった。丸坊主になった松の枝振りにも、くずれた土蔵の壁にも、見おぼえがある。ああ、この石灯籠だけは昔のままだ。すると、あの辺に兄貴の部屋があつて、その隣りが私の部屋だったのだ。そこからまわり縁を通つて、ここにあの部屋があつた。おけいさん、あなたがはじめてこの家に入つてきたあの座敷があつたのだ」

「あなたは……栄一さん」

けいの驚きと懐かしさの表情のうちに、暗転となる。

二人を結びつけた歌の歌詞は、

「かきながせる 筆のあやに

そめしむらさき 世々あせず」

と文語調で、明治の『小学唱歌集』のなかの一曲、題名も「才女」と古めかしく、紫式部と清少納言をうたったものだが、メロディはスコット作曲の「アニーローリー」で、当時は、「蝶々」や「庭の千草」「蛍の光」など、外国の名曲に日本語の歌詞がつけられることが多かった。

『女の一生』は五幕から成り、時代や季節、そこに住む人の変化とともに、家具や調度品、庭の景色などは変わるが、場面は

ずっと同じ堤家の奥座敷である。

一九〇五年（明治38）の正月、布引けいは、たまたま開いていた裏の木戸から、堤家にまぎれこんだのである。

中国貿易を営む堤洋行は、当主の亡くなったあと、妻のしずと弟の章介があとを引きつぎ、順調に業績をのばしてきた。しずには四人の子供があり、みんな元気に育ち、長男の伸太郎は二十三歳、次男の栄二は二十歳、総子は二十二歳、ふみは十七歳になっている。しずの誕生日とも重なっているお正月は、一家だんらんの明るい笑い声にみちっていた。

そんな中へ飛びこんできたけいは、みすぼらしい身なりの十六歳だった。父も母もなく、おぼのところは世話になっていたが、ひどい仕打ちに耐えかねて逃げ出してきたのである。そんな境遇にもかかわらず、けいの性格は明るく、また、その年頃の女の子らしさをそなえていた。母親の誕生祝いにと、栄二が買っておいいた櫛を思わず手に取り、髪にさしたところをみつけられてしまう。あわてて返すけいに、栄二は、いったん使ってしまったものをお母さんあげることはできない、とつっぱねる。

「だったら、どうすればいいの。あなたのしろっていうようにするわ。どうすればいいか、教えて」

「どうすればいいか、そんなこと僕にだってわかるもんか」

ここで、けいは突然、

「ねえ、私、そんなに器量の悪い方じゃないでしょう」

と自分の容姿のことに話を変え、新橋や柳橋から芸者に出ても

引けをとらないとおぼに言われたこと、歌舞伎役者に似ていると近所で評判の魚屋の新ちゃんに手を握られたことなど、口早にしゃべる。

泥棒の嫌疑で警察に突き出されなかったための、必死の方策だったかもしれないが、明らかにこれは、異性の栄二を意識してのことである。

「あなた、女の子の手を握ったことあって」

「そ、そんなこと、ないよ」

「そうお、私だって、男の人に手なんて握られたの初めてよ。

とても変な気のするものね。身体中の血が、いっぺんにぶくぶくって煮え返るんじゃないか、と思うくらいよ。（笑って）私、新ちゃんを突き飛ばしてうちへ逃げて帰ったけれど、あわてて台所の鉄瓶蹴とばしてしまったわ。うちのおばさん、怒って物さしで私のほっぺたを二十もぶったけど、私、痛いとも何とも思わなかったくらいよ」

「おい、そんなにそばに寄るなよ。お前、どうして僕にそんな話をするんだ」

「あら、あなた、私が怖いのか？ なぜ、そんなおっかなそうな顔をするの。なんにもしやしなわいよ。あなたなら、私の手、握ったって、私、じっとしてよ。ほら」

あわてた栄二はけいを突き飛ばしてしまうが、十六歳の女の子と二十歳の男の子、大胆さと度胸の点で、勝負ははっきりしているとと言えるだろう。

騒ぎを聞きつけ、兄の伸太郎、そして母親のしずや叔父の章介が集まってきた。

けいは自分の生い立ちを話し出す。

母親は自分を生むとすぐに亡くなったから、写真で顔を見ただけで、声を聞いたことも抱かれた記憶もない。やさしかった父親は、日清戦争で戦死した。その父親が、母親のいない自分をふびんに思っ、誕生日にはいつも料理屋でごちそうをしてくれた。誕生日の今日、そのことを思い出して、急にがまんができなくなって、おばの家を飛び出してきた……。

事情を聞いて、みんなの胸に同情がひろがった。

同じ戦地におもむいたことのある章介は、いつもの皮肉を忘れて、

「姉さん。戦争のおかげで一代に産を成し、あなたのように子供から誕生日を祝ってもらう人もあり、同じ戦争で父を失って誕生日に町を彷徨する者もあり……さまざまですわねえ」

としみじみ感慨をのべると、しずも、警察に引き渡すようなこととはしない、と断言しながらも、けいには家に帰るようすすめる。

それは、四人の子供を育て上げた母親の経験にもとづいた言葉だった。

「子供を育てるってことはねえ、育てられた本人が思っているほど、そう簡単なものじゃありませんよ。自分のおなかを痛めた子供を育てるのだから、ときにはもうどうでもいいかわからないほどつらく、情けないことがあるものです。まして、たとえ親類

にもせよ、他人の子供を育ててくださったということは、並大抵のことじゃありませんよ。それからまた、人ってものは、その辺

にごろごろしているときは、邪魔になったり厄介者に思ったりしていても、さていなくなると、やっぱり惜しいことをした、可哀想なことをした、そういう気になるものですよ。あなたのおばさんにしても、今頃はきっとそう思っ、あなたの行く先を探していらっしやるにちがいありませんよ。悪いことは言いませんから、もうよそへは行かないで、家へお帰りなさい、ね」

説得されて帰ろうとするけいを栄二が追いかけて、

「これ、きみにあげるよ」

と櫛を手渡す。

受け取ったけいは、その場に泣き崩れてしまう。家を出るとき、おばから「もう二度と帰ってくるんじゃない」と言われたことを思い出したのである。

## 二 人生の選択のとき

第二幕は一九〇九年（明治42）の晩春、第一幕から四年の月日がたち、けいは二十歳になっている。

しずの配慮で、堤家に住み込んだけいは、陰ひなたなく家事に精を出し、誰からも頼りにされる存在になっていた。

かいがいしく手を動かしつづけるけいに、しずが声をかける。

「どつ、家の用事が多くてつらくない？」

「いいえ、もっとどんどん御用をお出しくださった方がいらいですわ。私なんか遊んでいるようで、もったいないと思っています」

「そんなことはありませんよ。家の方こそ、お前が来てくれから掃除は行きとどく、用はどんどん片づく、どんなに喜んでいられるかれないのですよ。でも、あまり無理をしないで、つらいときは遠慮なくそう言って休みなさい」

「つらいなんて、そんなこと決して。私、ときどきこんな暮らして夢じゃないかと思うくらいでございます。朝、目が覚めると、ああ、やっぱりほんとでよかったと思うんです」

「(笑って) 誰も彼もがお前のように遠慮がちな望みをもっていたら、世の中はどんなに穏やかに美しくなるでしょうね」

長男の伸太郎は中国語を学んでいたが、家業の商売よりも学校の先生に向いていると自分でも思うような性格だった。

けいは、「この間、栄二さまに波止場へ連れて行っていただきましたの」と、そのときの印象を楽しそうに伸太郎に話す。

「船から荷物がどんどん積みおろされるところや、引き渡しの際の立ち会いの目のまわるような忙しさや、今まで見たこともない税関の交渉なんか、何もかも生き生きしていて、頭の中へ涼しい風が吹きこんでくるようでしたわ」

「女のお前が、何だっであの騒々しい岸壁の景色にわくわくするのか、僕にはわからないなあ」

「岸壁の景色ばかりじゃありませんわ。私はお商売の電報を打

ちに行ったり、銀行の交換所へ出かけたりすることも大好きですわ。見るもの聞くものが珍しいせいかもしれません。私はお茶っぴいだから、そういう男らしい仕事の方が好きなんですわ、きつと」

次男の栄二は、中国大陸で苦勞を重ねて成功した父親の血を引いていた。同じように大陸に渡り、本気で馬賊になろうと思ったこともあった。けいは、そんな栄二に親近感をもっている。

「それじゃ、お母さまもずいぶんご苦勞なすってらっしゃるんですね」

「そりゃそうだろう。だからお父さんだって大事にしていたし、僕たちだってみなお母さんは大事にしなくちゃいかん、と思っはいるんだ」

「あなたの奥さまになられる方も、そんなに苦勞をされるのかしら」

「お前は、どんな人の奥さんになりたいと思ってるんだい」

「さあ、そんなことは考えてみたこともございませんわ。でも、馬賊になりたいなんて人の奥さんだけはいやですわ」

「だって、初めてお前がこの家へ来た晩、お前は、僕なら手を握ったってじっとしているって、言ったじゃないか」

「あら、いやだわ、今ごろそんなことを思い出したりなすって。あるとき私、おまわりさんに渡されたくないと思って、一生懸命だったんですもの。口から出まかせで、何言っただか、自分もおぼえてなんかいませんわ」

「へえ、口から出まかせだったのか。そんな策略だなんて知らないもんだから、少しは僕が好きなのかと思って、今まで親切にやって損しちゃったな」

こんな会話からも、けいが栄二にたいして好意をもち、栄二もまた同じように思っていることがわかる。

病身のしずにとつて、いちばんの気がかりは、堤家のあとりのことだった。

性格から言えば、次男の栄二の方が向いていたが、まず長男が家業をつぐのが当時のならわしだった。「やらせる気があるなら、早くやらせた方がいい、仕事が鍛えてくれるだろう」と弟の章介に言われ、決心を迫られる。

しかし、あの気性と身体できびしい貿易の仕事をやってゆけるかどうか。

しずの心は迷った。

そんなとき、いつも明るく、はきはきしたけいの姿が目にとまり、伸太郎に足りないところを、けいに補い助けてもらったら、としずは考えるのだった。

「もう、だいぶん前から考えてはいたことなんだけど、お前も女のことだし、いずれはどこかへ身を固めなくちゃならないんだけれど、そういうことについて、別に相談するところも、親身になつてくださるところもないでしょう」

けいは黙って、うなづく。

「それじゃ、どう、自分の誕生日にこの家へ迷いこんできたのも、何かの縁だろうから、いっそ本当にこの家の人になったら」

「まあ、奥さま、そんな、私……」

「そりゃ、女にとっては一生の岐れ目で、並大抵のことではないのだから、気が進まなければ無理にという性質のものではないのだけれど……」

「いいえ。気が進むとか、進まないとか、そんなことは思ってもみません。私のように、生まれも育ちもわからないような人間が、こちらのようなお宅に上がるなんて怖いと思うだけで……」

「そんなことを言うなら、私の方だって、親類から見放された大陸浪人の家族ですからね。それに私は、生まれをもらうつもりはないのです、人がほしいのです」

思いもかけない話を聞かされ、ただおろおろしていたけいにも、やがて話の中身が、自分が好意を寄せている次男の栄二ではなく、長男の伸太郎についてのことだとわかってきた。

「自分の子供のことを自分で言うのもおかしいけれど、あの子は家庭の旦那さまとしては誰に比べても恥ずかしい人じゃないと思います。ただ、人中へ出て激しい世の中を渡るには何か欠けた弱いところがある気がするのです。そこをお前に家の中から助けやってほしいのです」

「困りますわ、そんなに……でも、伸太郎さまはお家の仕事よりは、学校の先生のようなことの方が……」

「誰にだって自分一人の願ひというものはあります。私だって

子供は可愛いのです。子供のしたいようにさせてやりたい気持ちには誰にも負けません。けれどこれは私がさせるのではないのです。家がそうしろと命じるのです。わかりますか」

「はい、でも、私、奥さま……」

「子供に家を譲るということは、苗木を土地に植えつけるようなものです。親というものは取り越し苦労なもので、添木をしたりつかい棒をしたり、傍からみればそれほどまでにしなくともと思えることも、親にとっては一生懸命なのです。わかってくれますね」

「はい。それはよくわかっております、けれど……」

「お前はさっき、私の恩は忘れないと言ってくれましたね。だったらどうぞ、私のためにでも、このことを承知しておくね」

徹  
木  
々  
佐

「……はい」

しずの言葉は一つ一つ、けいの心を追いつめる。

子を思う親の気持ち、家業を大事にする女主人の立場、そして恩を感じる自分のためにも承知してほしいという説得……。誰にだって自分一人の願いというものはある」という伸太郎に向けて言われた言葉も、けいの心を縛る。

この時代、結婚は好きな相手と結ばれるばかりとはかぎらなかった。けいのような身分でなくても、職業や家柄による拘束もあり、いわゆる縁談というかたちでまとめられる方が多かったのである。

「生まれをもらうつもりはないのです。人がほしいのです」というしずの言葉は、身分や家柄にこだわらないという意味で、当時としては進んでいたと言えるだろう。しかし、その奥にあるのは、やはり家进行い、子を思う母の心であった。

しずが去ったあと、けいは胸に隠し持っていた櫛、あの日、栄二からもらった櫛を取り出し、二つに折って庭に投げ捨ててしまふ。

それは、自分一人の願いを断ち切る、人生の選択のときでもあった。

### 三 人間を信じる

それから、六年の歳月が流れた。

けいは、堤家の女主人としてすべてに采配をふるい、貫禄もついてきた。伸太郎とのあいだに、知栄という娘ができていた。

次女のふみは、もともと姉の総子と親しかった野村精三と結婚し、縁のないまま三十をすぎた総子は見合いを重ねるが、なかなかまとまらない。

舞台は、そんな総子の見合いの日の堤家である。

工業クラブの懇談会に出かけたけいは、まだ帰らず、仲をとるもつ役目の精三は、総子の見合い相手と将棋をさし始めるといったあそばいで、居場所のなくなった総子は座敷にもどり、ふさはいらいら、伸太郎はなすすべもなく、それぞれの憤懣がつって



ゆく。

結局、叔父の章介といっしょにけいが帰宅したのは、見合い相手が帰ったあとだった。不機嫌な顔つきで黙りこんでいる伸太郎に、たまりかねたけいがたずねる。

「私のどこが一体いけないんですか」

そう問いただされても、伸太郎には具体的にどう答えていいかわからない。しいて言えば、性格が合わないとも言うしかないのであった。

「なるほど、お前は一家の女主人としては、じつによく行きとどく。店の仕事から奉公人の指図、台所から掃除洗濯、近所づきあい、何一つとして手抜きはない。よく一人であれだけまわるものだ、おれは感心しているくらいなんだ。しかしね、女ってものは、ただよく気がつく、よく働く、それだけのものじゃないよ。女には、どうしても女しかもっていないというものがある。お前にはそれがないのだ」

この言葉に、現代の女性ならどう答えるだろうか。女として、男としてと区別すること自体おかしい、と反論するかもしれない。その根本は、もちろん、人間としてということであろうが、それだけでは具体的な生き方としては、あいまいである。

けいも、

「まあ、それは一体どういうことですか。女しかもっていないものって何なんですか」  
と聞き返す。

「残念ながら、おれにもそれがどんなものか、口で言えるほどにはわかっていない。ただ、お前にはそれが欠けているということだけはわかるんだ。お前は店のことをほとんど一人で切りまわしてくれる。しかし、お前がそれほどできなかったとしても、おれは決してお前が出来損ないだったと、女として行きとどかないとも思わないだろう。総子のことにしてもそうだ。お前は次から次へいろいろの話を、かき集めるようにして持ってくる。誰にでもできることじゃない。ないと思っても、お前がそうすればするほど、おれはお前のすることについて行けない気がするのだ」

「あなた、それはひどくごきますよ。私が、お家のためを、あなたのためを、あなたの妹さんのためを思っていることを、そう一々裏から見ているらっしゃるなんてひどくごます」

「だから、お前が悪いと言っているわけじゃない。お前とおれとの性格の違いだから仕方がないと言っているのだ」

堤家の将来をせずに託されたけいは、ただひたすらその役割を果たしてきたのであった。伸太郎に不向きなところを補い、伸太郎にできないところを代わってしてきただけである。しかし、伸太郎はさらに一歩、突っ込んでこたすねる。

「そうだ、言いかけたついでにもう一つ言っちゃおうか。お前は堤家の重要人物となることの期待のために、お前自身の心さえ偽ったことがありますかい」

「今夜のあなたはどうかしてらっしゃるわ。あなたのおっしゃ

ることを伺っていると、私はまるで闇に鉄砲っていう感じがしますよ。私は叱られるような悪いことをした覚えもないのに、先生に叱られている学校の生徒みたいね。何でしょう、その、私自身の心を偽って……」

「栄二のことだよ」

「栄二さんのこと？」

「そうだよ。おれは初め、お前が栄二を好きなのだとばかり思っていた。栄二もまたお前が好きなのだとね。ところが、お母さんがお前をもらえという、お前も承知だという。それじゃ、おれの思い違いだったのかと、おれは考え直した。お前に、女になくってはならないものが欠けていると、はっきり知ったのは、栄二が無断で家を飛び出したあの日さ」

徹  
木  
々  
佐

「あなた、それじゃあなたは、今までそんな目で私を見てらしたのですか……」

「よそう。過ぎた話だ。古い古い、昔のおとぎ話だ」

「そう言って仲太郎は部屋を出てゆくが、けいにとつては胸えぐる言葉だった。」

そんなけいに、章介が声をかける。

「人間という奴はじつによく間違いをする。まるで間違いをするために何かをするみたいだ。ところで、あんたもその間違い組かね」

「しばらく考えこんでいたけいは、姿勢正しく、  
「いいえ、そんなことはありません。誰が選んでくれたのでも

ない、自分で選んで歩き出した道ですもの、間違いと知ったら、間違いでないようにしなくっちゃ」

と答える。

幕切れのこのせりふは、『女の一生』のなかでもいちばん有名になったもので、杉村春子の評伝の帯にも使われているが、ストーリー展開に沿って言えば、けいは自分で自分の道を選んだわけではない。しずの懇請に従い、栄二への思いを断ち切った、いわば選ばされた道なのであった。

けいの「自分で選んだ道」という言葉は、妹のふみに言っただけの自身の言葉を踏まえている。何かにつけ夫の精三の不満をもらし、自分の結婚は失敗だったと言うふみにたいして、けいは、

「失敗だの成功だの、そんなことを言ってみて、一体何かになるんでしょうか。誰が選んでくれたのでもない、ご自分でお選びになった道じゃありませんか。それに、あなたは何と思っちゃっしゃるか知りませんがね、精三さんはあなたには過ぎた旦那様ですよ」

けいの場合には、選ばされた道をみずから選んだものとして、受け取りなおしている。身寄りのない境遇、たまたま拾われた塚の家、要請された結婚と、けいには、与えられたものばかりだった。その人生を、けいは自分で選んだ道として生きることを決意するのである。

しかし、多くの場合、人生とはそういうものではないだろうか。

第四幕は一九二八年(昭和3)の中秋、けいは四十代になつて  
いる。

夫の伸太郎は別居、総子もふみも、このごろは家に寄りつかなくなつた。

二十年ぶりに中国から帰ってきた栄二は、すっかり変わつて  
いるのを見て、叔父の章介に、思わず感想をもらす。

「あの人も昔は空想家で、感情のあふれた娘でしたよ。私は、  
何だか別の人に逢つてゐるような気がして仕方がないのです」

「誰だつて若い間は空想家で、感情に満ちてゐるものだ。それ  
が年をとつてくれば、實際家で感情の枯れた朴念仁になつてしま  
う。しかし、あの女の偉いところは、若いある時期に、自分から  
思い切つてその空想と感情を断ち切つてしまったことだ。それか  
ら、あの女は、一度もそのことについて自分の感慨を洩らさな  
かつた。実にみごとなものだ」

「驚きましたね。世の中の美しいこと、嬉しいこと、幸せなこ  
と、そういうものを何ひとつ信じたことのない叔父さんが、姉さ  
んにたいして賛美を惜しまないというのは」

「何とでも言うがいい。お前は昔、仲のよかつた女に久しぶり  
に逢うのだ。もっと余韻のある、しみみりした場面を想像してい  
たのだから。それとも、昔お前を捨てた女が、今は亭主に捨てら  
れてゐる姿を見て溜飲がさがつた気がするのかね。どっちにして  
も、お前の考えは間違つてゐる。当てがはずれて、お気の毒さまと  
言うほかないね」

「いや、そのどちらでもありませんよ。私ももう四十です。昔  
の夢をいつまでも忘れかねるほど、ロマンチックな人間ではあり  
ませんがね。しかし、あの人をいま見ていると興ざめという気が  
するのは、またどうしようもありませんね」

「その興ざめな人間に誰がしたか、それを知つたら、お前もそ  
んな見方はしなくなるだろうさ」

「そんな……人がいるんですか。それは誰ですか」

「お前たちのおふくろと、このおれだよ」

「僕たちのお母さんと……どうしてそんなことをしたんです」

「おれがこの店を伸太郎にゆずれと言ひ出したとき、お前た  
ちのおふくろは、伸太郎一人では到底やつてゆけないことを見通  
してゐたのだ。だから、伸太郎の女房にあの女をと望んだ。おふ  
くろにしてみれば、特別な恩恵でも与えるつもりだつただろう。  
相手の気持ちも何も考えず、子供可愛さのエゴイズムからしゃに  
むに押しつけてしまったのだ。おれはすぐあとで、それがあの女  
の本意でないことを知つたが、本人は何も言わなかつた。した  
がつて、おれも黙つていたんだ」

「ふーん。そんなことが……あつたんですか」

叔父の言葉に、栄二は感慨にふけるが、その思いも一瞬のこと  
だつた。

けいは、訪ねてきた警察に栄二の存在を告げてしまつたのであ  
る。

「姉さん、私はたつた今、叔父さんからあなたの身の上につい

て、僕の知らないことを聞きました。そうしてちょっとの間、大変素直なあなたたいショックを受けました。しかし、それはほんのちょっとの間、じつに短い、甘ずっぱい感動でしたよ。あなたは私を、ほかの誰でもない、この栄二をさえ売ることのできる人なんですわね」

「ゆく所へ行つてよく考えていらっしやい。売るとか売らないとかいうのは、あなたの仲間同志でおっしゃることです。私は一度もあなたの仲間になった覚えはありません」

「ははは。こりゃ一本参りました。なるほど、あなたは私の仲間じゃない。あなたは私にとってはむしろ敵に属する人だったかもしれない」

栄二が連行されたあと、一部始終を見ていた娘の知栄も、家を出て父のところへ行くと言い出す。

「お母さま、お母さまはそれでご自分がさびしくはないのですか。お父さまの本当の弟さんじゃありませんか。お母さまだって、久しぶりにお会いになった義理のある人じゃありませんか。自分の家族を自分の手で縛るようなことをなすって、お母さまは苦しくはないのですか」

知栄の言葉づかいは、親子の争いとは思えないほど、ていねいである。

今日、こんな言い方で親子げんかをするところは、まずないだろう。ふつうの会話でも、親にたいして敬語をつかうことはなくなっているように思われる。

けいは娘にたいして、

「世の中には、苦しくてもさびしくても、しなければならぬことというものがあります。叔父さまにも、それはわかってらっしゃると思いますよ」

と答える。

知栄が去って行ったあと、けいは叔父の章介に、

「これで私はほんとに一人きりになってしまいました。何だかかえって、さっぱりしたような気がします。叔父さま、あなたも今度こそ行つておしまいになるでしょう。さあ、いらっしやい、私はもう驚きません」

「ところが、おれはもう決して、お前のそばから離れることはないだろう。世界中の者がお前から去って行つても、おれはお前のそばについているだろう」

この章介という人物は、脇役ながら重要な場面にはかならず登場する。

けいが自分の思いを断ち切つたあの日、櫛を折って投げ捨てるのを目撃したのも章介であった。ずっと独身を通すが、それには若い日、思う人が別のところへ嫁いで行ったという経験が影響していると暗示されている。

みんなが自分から離れてゆくのは当たり前だ、自分で自分がいやになつてくる、と嘆くけいに、章介は、

「おれは、あんたのお陰で初めて人間というものを信じていることができるようになったと思つているくらいだ」

と話す。

これは、男と女の出会いだろうか。そうかもしれない。

しかし、男としてとか女としてとかは、もう大きな問題ではなくなっているとも言える。先に、人間という言葉はあいまいだと言った。この場合も、けいは女、章介は男であることは確かである。そんな二人が出会っているところは、もはや男や女という區別は超えているとも言えるだろう。人間には、いわゆる恋愛や結婚といった形をとらなくても、深い関係というものがある。

「初めて人間というものを信じていることができるようになった」という章介の言葉は、何を意味しているのだろうか。

人間はときに、自分のいちばん大切なものを思い切ることができ、そんな力を秘めた存在だ、それをまのあたりに見た、と言いたかったのではないか。

#### 四 和解と展望

第五幕は昭和二十年二月、別居していた伸太郎が二十年ぶりにけいを訪ねてくる。それには理由があった。

娘の知栄は、けいにはもちろん言わず、伸太郎にも事後承諾のかたちで、音楽家の松永と結婚し、二人の子供を得ていたが、その夫にもついに召集令状がきたというのである。夫がいなくなつたあと、二人の子供をかかえての暮らしは大変だろうから、もしよければ知栄たちをこの家に引き取ってもらえないか。それ

が伸太郎の相談だった。

伸太郎はけいの入れた茶を飲みながら、

「何だか、ここにこうしていると、妙な錯覚を起こしそうだな。ずうっと以前に、ここで、こんなふうにして、やっぱり茶を飲んでいたことがあるような……」

「私も、今ふっと、そんな気がいたしました。誰の考えることも同じようなことですね」

夜のしじまの向こうで、「福は内、鬼は外」という子供の声が聞こえる。節分だった。

「今日の日のために、配給のお豆をとっておきました」と、けいが枡に入れた豆をもってくる。

「お母さまの言いつけもありますし、やっぱり家のしきたりだけは守りませんと。どうぞ、大事に撒いてくださいまし。厄を払って、幸せのきますように」

伸太郎が豆を撒くと、子供のようにはしゃいで、けいが拾う。

「何もかも、昔のままだ。節分も、けい、お前も」

しばらくして帰ろうとする伸太郎が振り返って、

「何か、言ったかな」

「いいえ、別に」

「空耳か」

けいは思い切って、

「あの、知栄がもどりますときに、あなたもごいっしょにお帰りになってくださいませんか」

「この家に、おれのもどってくる部屋が、まだあるかな」

「あなたのお部屋は、あなたがお出になったときのままになっておられます」

「おぼえておくよ」

と伸太郎は障子をあげようとして、そのままそこに倒れてしまふ。

空襲警報が暗い夜空をかけめぐっていた。

ふたたびエピソードと同じ、焼け野原の東京。

一週間前に刑務所を出た栄二は、堤の家の消息を知りたいと思ひ、世話になっていた友人宅からやってきたのである。

夜が更け、寒さがつのってきたので、けいが焚き火に木切れをくべる。

「兄貴が亡くなったということは聞いたけれど、別居のままですか」

「はあ、でもどういふものですか、最後のときになって突然、この家へ訪ねてきてくれました、息を引き取るときは、私の手をとってそのままでした」

「そうですね。それはよかったですね。兄貴もやっぱり、あなたと仲直りがしたかったですよ。それが夫婦です。そうですね、その話を聞いただけで、私はあの死に物狂いの汽車に揺られてきたかがあるというものですよ」

「ええ。でも私、このごろになってときどき思うんです。私の

一生ってものはいったい何だったんだろうって。小さい時分から、ただもうひと様のために働いて、ひと様からああしろと言われればそのようにし、今度はそれがいけないと言って、身近の人にそむいて行かれ、やっとみんな帰って来てくれたと思ったら、何もかもめっちゃめにされてしまい、私っていう者が一体どこにあるんだか……」

「今までの日本の女の人には、そういう生活が多すぎたのです。しかし、これからの女はまた違った一生を送るようになるでしょう」

「そうですね。そうですね。そうあってほしいと思います。でも私は今、私の一生はこれからという気もするのです。あなたのお子さんや孫たちの行く末を見守りながら、これから始まる新しい歴史のなかに、私の一生も入れていただこうと思うのです。私の一生なんか、これからのときに比べれば、もの数でもありませんよ」

「さあ燃えた。手をお出しなさい……。わたしは今、ずっと昔読んだ外国の短篇を思い出しているんですがね。それは今夜のように月の明るい夜、ひとけもない公園で、えんぴ服と夜会服を着た老人夫婦が静かにカドリールを踊るといふんですがね。どうです、わたしたちもこの月の下でカドリールを踊ってみませんか」

「え」

「いえ、その老人たちの色あせた式服にも、はなやかな昔が数々折りこまれているように、私たちの老年にも、一つや二つの

思い出があるうというものですよ」

「ほんとうに。踊りましょっか」

顔を見合せて、ほほえむうちに、静かに幕が下りる。

幕の向こうで、二人がカドリールを踊ることは、まずないであろう。焼け野原の月の夜、数十年の歳月をへて再会したけいと栄二は、しかし、遠い日の淡い触れ合いをいつくしみながら、心のなかで手をさしのべあったと言えり。

けいがいっしょに参加し、見とどけたいと願った子供や孫たちの行く末は、さて、その後どのようになったであろう。物質的には驚異の復興をなしとげ、経済大国とまで言われた時期もあった。二度と戦争の脅威にさらされることもなく、平和のうちに年月が過ぎた。しかし、心は本当に豊かになり、そして安らぎを得ているだろうか。

『女の一生』のなかの言葉は、古いしきたりに縛られているように聞こえるものもある。しかし、そこから解放されて、私たちの言葉はいま自由にはばたき、美しく飛翔しているだろうか。戦争や貧困をまぬがれた私たちの心は、自分以外の人を思いやるゆとりをもっているだろうか。

『女の一生』は、もともと大東亜戦争下、政府の提唱する「国民演劇」の一つとして書かれた作品である。

一九四三年(昭和18)八月、日本の占領地域の協力体制強化のため、「大東亜会議」が開かれ、共同宣言が出された。それには、

大東亜圏の共存共栄、独立親和、文化高揚、互恵経済の発展、人種差別撤廃などがうたわれていた。情報局から委嘱された森本薫は、独立親和をテーマとして『女の一生』を書いたのである。

戦後、書き直されたプロローグとエピローグは、はじめ次のようになつていた。

エピローグもプロローグも、一九四二年(昭和17)の正月の夜、日本間の座敷を改造して、中国の家具を入れた部屋。五十六歳になつたけいが一人でいるところへ、中国人の妻との間にできた栄二の娘三人が登場する。

けいの最後のせりふも、

「私の一生はこれからですよ。あなたがたを一人前にしてあなたがたのお父様の手に渡す。これが私の一生です。あなたがたはみんな中国へ帰って、新しい時代を造るお母さんになる人達です。その新しい時代の中に、私の一生も入れていただけこうと思つているのですからね。(家の外から軍歌と万歳が聞こえる) ああ、また兵隊さんが通る。あの方たちもやっぱり新しい時をつくるためにああして出てゆくのです。過ぎてきた一生なんか、これからの時にくらべればもの数じゃありませんよ」

つまり、「独立親和」のテーマに従い、中国との関係が前面に出されていた。

敗戦というかたちによる終戦は、日本を焦土と化したのが、同時にまた、それまでの軍部独裁による暗雲が払われる契機とも

なった。

戦後、けいのせりふが「私は今、私の一生はこれからという気もするのです。あなたのお子さんや孫たちの行く末を見守りながら、これから始まる新しい歴史のなかに、私の一生も入れていただこうと思うのです。私の一生なんか、これからのときに比べれば、もの数でもありませんよ」と変えられて、より普遍性をもった作品となり、大勢の観客の共感呼んだ。

しかし、戦後はまた戦後で、アメリカ占領軍による検閲制度があったはずだ。それがほとんど改訂することなく上演可能となったのはなぜか。

演出家の戌井市郎は、その理由を脚本の裏に隠された戦争批判に見ている。それはすなわち、日本中心の軍国主義への批判であり、GHQはそうとも読めるせりふを削ることはできなかったのである。

その例は、伸太郎の「ひとつの言葉がわかる」ということは、その国の文明と人間の特質を会得するということだ」というせりふや、章介の「清国の運命はアジアの運命につながっています。その清国の運命に関わりを持ち出した堤家の将来は、見方によっては始末におえないやっかいな泥沼に足を突っ込んだようなものですよ」というようなせりふに見ることができると。

戦時下の国策によって作られたとしても、また、占領下の検閲を受けていたとしても、芸術作品が時を超えて生きつづけるためには、それ自身のいのちを宿していなければならぬ。『女の一

生』が九四七回も上演されたのは、そこに、時代の制約を超えて人々の心を打つものがあったからである。杉村春子の言によれば、『女の一生』には親子三代つづいた観客がいるとのことだ。主人公・布引けいと同時代の者だけが理解し感動する作品ではなかったのである。しかも、演劇というジャンルは、上演されなければ意味がない。杉村春子という名優と出会った『女の一生』はしあわせだったが、同じように、『女の一生』という作品を与えられた杉村春子も幸運だった。

さて、日本国内が安保闘争で大きく揺れていた政治の季節、一九六〇年（昭和35）に、文学座は『女の一生』中国公演を挙げる。すでに中国を訪れたことのある杉村春子の熱意に動かされたの訪中であつた。候補作品として、三島由紀夫の『鹿鳴館』もあげられたが、中国側が難色を示した。

中国公演に際して、栄二の描かれ方が問題になった。戦争が終わり、けいと再会した栄二はただ昔を懐かしむだけで、自分を警察に突き出したことには触れない。最後は、「どうです、わたしたちもこの月の下でカドロールを踊ってみませんか」というせりふになる。これでは当時の中国に受け入れられず、公演そのものが中止の憂き目を見る。演出の戌井市郎は、杉村春子の意向に従い、大幅にせりふを改訂した。

栄二のせりふとして、

「率直に言って、私はあなたに許しがたいものをいまでも持っています。けれど、あなたの明日に希望がもてるようになったと



き、それは忘れましょう」

が書き加えられ、さらに幕切れの栄一とけいのせりふは、

「今までの日本の女の人には、そういう生活が多すぎたのです。

しかし、これからの女はまた違った一生を送るようになるでしょう。またそうでなければならぬんです」

「そうでしょうね。そうあってほしいと思います。けれど私の犯したあやまちが全く消えたとは思いません。沢山の戦争の犠牲者に、とりわけ私たちの家にもっとも縁の深い中国の方々に、どうして償いをすればいいのでしょうか。いまの私にいちばん心にかかっているのはこのことなのです」

と変えられた。

そして、若者たちの歌う革命歌が聞こえて幕となる。

福田恆存は、この改訂に関して、もし森本薫が生きていたら、

たとえ中国人に「心からお詫びしたい」と思っても、たとえ「貧

乏人も金持ちもない世の中をつくること」を考えていても、今

この場に臨んで改作などしなかったであろう、とのべ、これは芸術的良心の問題だと言っている。

一九八六年（昭和61）五月、生誕の地である大阪市の淀川沿い、中津公園のなかに森本薫の文学碑が建てられた。そこに刻まれた文字は、

誰が選んでくれたのでもない

自分で

歩き出した道ですもの

（森本薫「女の一生」より）

であった。

文学座の大きな財産ともいうべき『女の一生』だが、杉村春子なきあと、布引けいの役は、同じ文学座の平淑恵に受け継がれている。